

# コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動の推進 —思いを伝え合い、お互いを大切にできる児童の育成—

中妻佳代(NAKATSUMA Kayo), 坂田美佳(SAKATA Mika)  
鳴門市林崎小学校

## 要約

本校では平成 21 年度より、全教職員で伝え合う力の育成に向けての共通理解を図りながら、実践を重ねてきた。また、小学校 5・6 年生に外国語活動が導入された平成 23 年度、「徳島県地域活用コミュニケーション能力育み事業」の研究指定を受けた。そこで、コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動を創っていくことが、児童の伝え合う力を育てることにつながると考え、取組を進めることにした。外国語活動における「心が動く授業づくり」「心と学びをつなげる小中連携」の 2 点を中心に実践の一端を報告する。

(キーワード：小学校外国語活動，授業づくり，小中連携)

## 1. はじめに

私たちは、全ての子どもたちが学校・学級の中で、そして社会の中で、自分らしさを発揮し、他者と協力し合って幸せに生活してほしいと願っている。だからこそ、その実現のための大切な力となる、コミュニケーション能力の育成に向けて、地道で着実な取組を学校教育全体で行う必要があると考える。

そこで本校では、平成 21 年度より、全教職員で伝え合う力の育成に向けての共通理解を図りながら、次のような「ひまわり図」を作成し、日々、実践を重ねてきた。

そのような中、平成 23 年度、小学校 5・6 年生に外国語活動が導入された。また同年、本校が「徳島県地域活用コミュニケーション能力育み事業」の研究指定を受けるとともに、「第 8 回全国小学校英語活動実践研究大会」授業公開校となった。

コミュニケーションを図るためには、話を聞いてくれる相手の存在や、話す・聞くためのスキルや自信が欠かせない。このように考えると、外国語活動のコミ



コミュニケーションにおいても「伝え合うためには、思いやり・自信が必要である」という、本校が以前から大切にしていた「ひまわり図」が、大きく関連することが見えてきた。研究を通して、コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動を創っていくことが、児童の伝え合う力を育てることにつながると考えたのである。

そこで研究テーマを「コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動」サブテーマを「思いを伝え合い、お互いを大切にできる児童の育成」として、取組を進めることにした。

## 2. 本校の現状

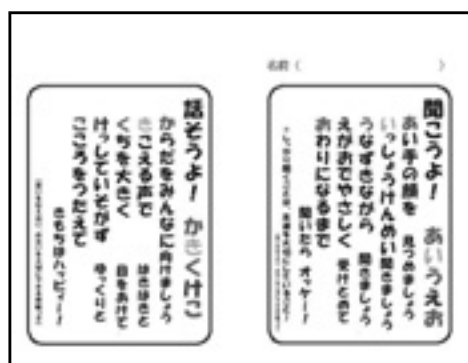
### (1) 児童の実態

本校の児童数は403名、学級数は、特別支援学級、第4学年、5学年が3学級、その他の学年は2学級、計17学級である。校区には住宅地や工場、商業地が広がっている。今年で創立138年目をむかえる本校区の、保護者や地域の方々の、学校に対する関心は高く、学校教育に対しても協力的である。児童の実態として「明るく活発で、得意なこと、慣れていることには意欲的に取り組む反面、友達との関わりや新たなこと、思いを伝え合うことにおいては消極的になってしまう」という傾向が見られた。特に「伝え合う力」の育成は、本校の長年の課題として挙げられていた。そこで課題解決に向けて、「全教職員が協働して、学校教育全体で取組を重ねることが必要」と、共通理解を図ってきたという経緯がある。

### (2) コミュニケーション能力とは

コミュニケーション能力というと、伝えることにスポットがあたりがちであるが、まずは、周りの人の話や意見を聞くことを大切にしたい。相手の話を聞くことは、相手を尊重していることの表れであり、他者との豊かな人間関係へとつながっていくと考えるからである。そこで本校では、コミュニケーション能力（伝え合う力）を次のように捉える。一つは学び（知識・情報）を確実にし深めていく力、もう一つは他者との良好な関係を築いていく力である。これらは多文化共生時代の21世紀を生きていく子どもたちにとって「生きる力」となるものである。

こうした考えにより、平成22年度に、全教職員の意見を反映したコミュニケーションスキルの作成に取り掛かり、本校オリジナル「聞こうよ！あいうえお」「話そうよ！かきくけこ」を完成させた。毎年見直しを行い、今年度も各教室に掲示し、教育活動全体の中で活用している。



### (3) 本校の外国語活動

5・6年生とも『Hi, friends!』をベースに、児童の実態や他教科等との関連を図りながら、各学年担任が作成し、学級担任が中心となって進めている。年間35時間のうち約15時間はALTとのTT授業、その他の時間は学級担任単独の授業である。単元によっては、

他の教員や留学生、中学校教員等をゲストティーチャーとして迎えたり、TT を行ったりして指導体制の充実を図っている。単元計画作成の際には、ゴール（単元終末）での児童の姿をイメージし、ねらいに沿った計画を立てることを、特に大切にしている。つまり、こんな児童に育てほしいという願いを指導者が明確に持ち、学習指導要領の3つの柱(気づき・慣れ親しみ・コミュニケーション)に沿って、計画を作成するように心がけている。

また、授業実践においては、児童が進んでコミュニケーションを図りたくなる、つまり、思わず「聞きたくなる」「伝えたくなる」ような心が動く授業づくりをめざしたいと考える。よって、『Hi, friends!』を、地域や児童の実態に合わせて、「林崎小学校らしい Hi, friends!」にすることを心がけている。

### 3. 研究の内容

#### (1) 心が動く授業づくり

児童が思わず「聞きたい」「伝えたい」と思うためには、地域や児童の実態、他教科等との関連を図りながら単元を構成するとともに、授業の中でも様々な手立て・工夫が必要である。よって、授業づくりでは以下の3点で、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育てることができるようになりたいと考えた。

##### ①意欲を高めるゴールへの見通し

見通しの立たないことに対して、不安がよぎったり、意欲がわかなくなったりすることは多い。よって、単元を計画するときには、児童が単元の早い段階から、単元終末でのコミュニケーション活動を意識できるように、児童の実態に即した単元計画を立てるようにする。

##### ②スモールステップで自信を育む

児童が進んでコミュニケーションを図ろうとするためには、他教科と同様「伝える技術」も必要である。よって外国語活動においても、児童の自信・意欲を育むために、活動をスモールステップで組み込み、その方法にも工夫を加えていく。

##### ③つながりを深める活動の工夫

コミュニケーションを図るには、相手の存在が欠かせない。よって外国語活動の中で、児童が様々な人々とつながりを深めることができるような工夫を各所で行うことにする。

#### (2) 心と学びをつなげる小中連携

小学校に外国語活動が導入され、不安を抱いている児童も少なくない。また、教員も期待とともに戸惑いや不安を持っていると思われる。よって、小学校と中学校が、どのような連携を図っていくことが、児童・教員にとって意義あるものとなるのか、気持ちと学びの両面がつながるような小中連携のあり方について、研究を進めていく。

### 4. 研究の実際

#### (1) 心が動く授業づくりの実際

## 第5学年の実践 Hi, friends! 1 Lesson3 How many? 「いろいろなものを数えよう」

本単元ではこれからの活動の中で繰り返し使われる「数」のうち、児童が普段よく耳にしていると思われる1～20を取り上げる。ただ単に数を言わせるのではなく、歌やチャンツ、ゲームの中で具体的な場면을提示し、児童の意欲を喚起しながら、数の言い方や尋ね方に慣れ親しませるようにした。実際に身の回りの物を数える活動では、事前に数を予想させたり、クイズ形式にしたりして、数える必要感をもたせるように心がけた。



【第1時：What's this?クイズ】

また、世界には様々な数え方があることを知り、日本との違いや共通点に気付かせた。その際には「4」「7」等を例に挙げ、日本語にも様々な数え方があること、さらには、「〇個」「〇枚」等助数詞がつくことにも触れるようにした。

単元の最後には、自分と同じ数のりんごを選んだ友達を探したり、オリジナルのクイズを出し合ったりした。これらの活動を通して、英語を使ったコミュニケーションの楽しさを実感させるとともに、互いの理解を深め、学級のよりよい仲間づくりにもつなげていきたいと考え、本単元を設定した。

### ①意欲を高めるゴールへの見通し

児童が思わずコミュニケーションを図りたくなる状況を授業の中につくるためには、ゴールを見通した単元計画や、それぞれの活動内容・方法が、児童の実態に合った魅力的なものでなければならないと考え、実践を行ってきた。

本単元の1時間目「いくつあるか数えよう」は、デジタル教材や『Hi, friends!』のテキストを使い、いすや鉛筆を数える活動である。しかし、すぐに画面全体を見せて“**How many chairs?**”と数えさせるのでは、意欲が高まらないと考えた。そこで、画面を見せる前に、「**What's this? クイズ**」を組み込み、封筒の中から少しずつ絵カードを出したり、英語でヒントを出したりして、児童に「何かな？」と注目させることにした。そのことが後の積極的な活動につながった。

また、単元の最後に行う「**How many? クイズ**」にむけて、3時間目には担任自作の「**How many? クイズ**」を提示した。クイズに答えながら「ぼくだったら、こんな絵を使いたいな。」「もっと難しいのができるよ。」等と、目を輝かせている児童の姿が見られた。4時間目には、ALTのクイズを提示することで、本時で児童が行うクイズ大会のモデルを示した。担任とALTのやりとりを見て、児童は自分たちのクイズ大会の進め方を知り、意欲を高めることができたようである。

### ②スモールステップで自信を育む

3時間目の「りんごはいくつ?ゲーム」では、20個あるりんごのうち、好きな数だけ塗って“**How many?**”と同じ数の友達を探す。しかし児童の実態を考えると、20までの数で同じ数の友達を見つけるのは難しいと感じた。そこで1度目は1～10個、2度目は11～20個と数を限定して色を塗らせ、活動を2段階に分けることにした。そうすることで、普段、積極的に友達と関わるのが苦手な児童も含め、全員が同じ数の友達を

見つけることができ、うれしそうな様子が見られた。

また「歌が大好き」という本学級の児童の様子と「楽しみながら語彙や表現に慣れ親しんでほしい」という担任の思いから、チャンツや歌を毎時間取り入れている。本単元でも「Ten Steps」と「How many?」という2曲を取り入れた。体を動かしながらくり返し歌ううちに覚えてしまい、休み時間や掃除の時間に自然と口ずさんでいる児童もいた。

担任は、アクティビティや歌等について、常に新しい情報を集め、たくさんの引き出しを持っておき、その時間のねらいや児童の実態に応じて、よりふさわしい活動や方法を選んでいくことが大切だと考える。そのことが児童一人ひとりの自信を育み、より積極的な活動につながっていくのではないだろうか。



### ③つながりを深める授業の工夫

〈児童とALTとのつながり〉

本単元は2時間目と4時間目を、ALTとのTTで行った。ALTとの授業の際には、外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする意欲を一層高めるため、ALTの英語を聞かせたり、児童がALTと直接やりとりしたりする機会を、意図的に確保している。こうした活動を続けていくうちに、知っている単語がないかじっくり聞いて、ALTの話を何とか理解しようとする態度が育ってきていると感じる。さらには、様々な話を聞くことで、児童は日本と外国の文化の違いや共通点等、たくさんの発見をしている。

〈児童同士のつながり〉

本学級の児童は友達に何かを伝えたり、友達のことを聞いたりすることが好きで、積極的に活動する。しかし、中にはそのようなことに苦手意識を感じている児童もいる。そこで本単元に限らず、コミュニケーションの場面では、伝え合うことの楽しさを一人ひとりが感じられるようにと考え、様々な活動を設定している。

本単元の4時間目には「How many? クイズ」の活動を行った。総合的な学習の時間に使用した経験を生かし、パソコンのお絵かきソフトを使って児童がオリジナルのクイズを作成した。「自分のクイズを聞いてほしい」「友達のクイズに答えたい」という思いから、より意欲的にコミュニケーションを図る様子が見られた。グループで楽しく活動する中で、児童が自然に“How many?”や英語の数を使ったり正解者に“That's right.”と声をかける等、円滑なやりとりの工夫に気付いたりする機会にもなった。

最後には教材提示装置を使って、全員の前でクイズを紹介する機会を設けた。黒板に大きく映し出された自分のクイズを自信をもって紹介する姿や、自分のクイズと友達のクイズを比べながら楽しそうに答える姿が見られた。

#### 〈児童の振り返りカードより〉

☆ 今日は、自分で作った「How many? クイズ」をして、みんなが答えられるかドキドキしました。ブレント先生もいっしょに答えてくれてうれしかったです。

☆ ○○さんのクイズの言い方が、わかりやすく聞きやすかったので、自分も次にするときにはそうしたいと思いました。今日のクイズは自分で作ったオリジナルで楽しかったです。

本単元では、児童が「できる」「できない」という表現に慣れ親しみ、「できること」を尋ねたり、自分の「できること」や「できないこと」を紹介したりする活動を通して、コミュニケーションへの積極的な態度を養うことをねらいとする。そこで、児童の実態に則した単元計画をたて、「相手意識のある」「中身のある」活動を行いたいと考えた。



【第4時：できることを紹介しよう】

まず、ALT や学級担任が、自分の「できること」「できないこと」を紹介カードを用いて紹介した。このことにより、児童が単元の見通しを持ち、意欲的に取り組めるようにした。同時に、児童のスピーチモデルとなるよう構成した。第2時は、学級担任単独での授業であることから、デジタル教材の効果的な活用も心がけた。第3時には、中学校教員や友達のことを知るとともに、使用語彙・表現に自然な形で慣れ親しめるようにした。

これらの活動を通して、児童に、言語を用いてコミュニケーションを図る楽しさや大切さを実感させたい。さらに本単元が、児童の自己肯定感を高めるとともに、互いの理解を深め、認め合う仲間づくりへの一つのきっかけとなることを期待し、本単元を設定した。

#### ①意欲を高めるゴールへの見通し

本単元では、単元終末の4時間目に、自分のことを友達と積極的に伝え合う活動を設定していた。その活動を、思わず「聞きたい」「伝えたい」と思うような「中身のある」活動にするには、単元の早い段階から、児童がゴールイメージを持てることが大切だと考え、ALT や学級担任が繰り返しスピーチモデルを示すように構成した。

1時間目にALT の自己紹介を聞いたある児童は、「私は、テニスのことを言いたい。『I can play tennis.』という言い方でいいのかな」と終末の活動に見通しを持ち、「大好きなテニスのことをみんなに伝えたいから、活動にしっかり取り組もう」と意欲を高める姿が見られた。またある子は、ALT や学級担任のできないことを知り、「ぼくと同じで安心した」と、ALT や学級担任と心を通わす感想を、振り返りカードに記していた。

また、スピーチモデルを示す際には、常に、話す時、聞く時のポイントを問いかけ、児童が「相手意識」を持って聞いたり、言ったりできるように心がけてきた。この時、「うなずきながら聞いたらいい」「相手に聞こえる声ではきはきと言う」等、先述のコミュニケーションスキルをもとにして考える児童もおり、外国語活動は他教科と何ら変わりがないこと、小学校教育の一環であることを感じることもできた。

こうしたゴールイメージを持たせる単元構成や活動内容・方法の工夫により、児童は活動に向けての意欲を次第に高めていった。

#### ②スモールステップで自信を育む

高学年になると「伝え方が分からない」「恥ずかしい」等の理由で、自信や意欲が低下する児童も少なくない。そこで、児童が楽しみながら使用表現等に慣れ親しみ、単元終末に向けて自信を高めていくことができるよう、2時間目・3時間目の活動をスモール

ステップで組み込み、その方法にも工夫を加えている。

2時間目には、「カード並べゲーム」で、動作の言い方をたっぷりと聞き、カードを並べていった。動作の言い方に慣れていない児童も、ペアで活動することで自信をつけていくことができた。その後「心をついにゲーム」を行った。このゲームは、ペアで握手をしながら“Shake hands 1, 2”と言う。次に三枚の絵カードの中から、相手が言うと思う言葉を推測し“I can play baseball. (soccer, basketball)”等と言い、言ったことが同じであればハイタッチをするゲームである。



このように慣れ親しみの時間の活動やゲームを、児童の実態に応じて工夫することで、児童は楽しみながら自然と使用表現に慣れ親しみ、単元終末の自分のできることを紹介し合う活動に向けて、自信と意欲を高めていくことができた。

### ③つながりを深める授業の工夫

外国語活動では、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成をめざしている。しかし、本単元を実践した時期、児童は以前からの友達と行動しがちで新たな人間関係を築きにくい傾向にあった。そこで、児童同士の新たなつながりが生まれ、相互理解が深まるように、活動内容・方法に工夫を加えた。

例えば、先述の「心をついにゲーム」のように男女のペアワークや握手、ハイタッチを取り入れ、友達関係が広がるように配慮している。インタビュー活動では、インタビューする相手や人数を指定することで、いろいろな友達と交流できるようになってきた。

また、授業終末には「振り返り」の時間を設け、思ったことや気付いたことを述べ合い、思いを共有できるようにしている。このことで新たなつながりを広げたり、相互理解が深まったりするようになっている。

単元終末の4時間目には、実際のコミュニケーション活動が設定されることが多い。よって、より豊かなコミュニケーション活動となるように、一方向の発表形式ではなく、スピーチ後に“Can you~?”と聞き手に尋ねたり、コメントをし合ったりする、双方向のコミュニケーション活動にした。

児童同士がつながり合い満足そうな笑顔に、指導者が新たな発見をすることもしばしばある。授業時の様子や振り返りカードから児童は、言語を用いたコミュニケーションの楽しさや大切さを感じていた。また、自己肯定感を高めたり、相互理解を深めたりする感想もあった。これらのことから外国語活動は、互いを認め、豊かな人間関係づくりにもつながることを実感することができた。

#### 〈児童の振り返りカードより〉

☆ 発表する班によって、スピーチや質問が違っていった。聞く側も話す側も楽しかった。また、違う班ともやってみたい。

☆ 人によって、「できること」や「できないこと」がいろいろだった。「みんな違ってみんないい」ということが分かった。

## (2) 心と学びをつなげる小中連携

### ①小中連携の必要性

「外国語活動を通して育成したことが、中学校にどのようにつながるのか」「外国語活動と中学校英語科との共通点と相違点は？」児童と活動を進めるにつれ、1時間の授業の大切さとともに、小学校と中学校が連携し合うことの重要性を、意識するようになっていた。また、学習指導要領の外国語の目標からも、小・中・高等学校ともに、「外国語活動を通して」「コミュニケーション能力を養う」という共通した目標が示されており、指導の一貫性が重視されていることが明らかである。

### ②情報交換・交流

こうした中、昨年度、鳴門第二中学校区として初めて、小中の教員での情報交換や、学級担任と中学校教員による TT 授業を行うことができた。これらの連携から、「外国語活動での使用表現・語彙は再度、中学校英語で出てくること」や、「小学校では『伝えたい・聞きたい気持ち』を大切に、友達と言語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童を育てること」の大切さを再認識できた。

そして今年度は、「鳴門市小中高連携外国語教育研究委員会」のリードのもとに、鳴門市内全ての中学校区ごとに「外国語教育推進委員会」が発足した。このことにより、年度はじめから連携計画を作成し、段階的に連携を進めることができるようになった。こうした体制の充実により、「第二中学校区外国語教育推進委員会」として、年に複数回小中教員が集まり、情報交換や交流授業等、小中連携の取組を行うことができるようになっている。



【第二中学校区外国語教育推進委員会の発足】



【中学校教員との TT 授業】

### ③交流の具体例

#### 〈学級担任と中学校英語科教員による TT 授業〉

今年度6月には、「第二中学校区外国語教育推進委員会」の連携の一環として、Lesson 3の第3時に、学級担任と中学校英語科教員とのTTによる授業研究会を行うことができた。その際、第二中学校英語科教員や里浦小学校外国語活動担当者も授業参観し、ともに研修を深めた。

中学校教員や ALT との TT 授業の際には、英語での言い方を教える等、専門性を発揮していただける場を多く設定すると同時に、中学校の先生のことを知ることができる工夫も大切にしている。それは、「言葉は人と分かり合うためにあること」を実感してほしいと考えるからである。中学校の先生のできることを尋ねる「Guessing ゲーム」を通して児童は、中学校の先生のことを「知りたい」からこそ、これまで親しんできた“Can you~?” の表現を使って何度も尋ね、自然に使用表現に親しむことができた。



#### 〈参観した中学校英語科教員の感想〉

- ☆ 教材の工夫や、児童が意欲的にコミュニケーションしている姿に感動した。今日のような活動を中学校でも取り入れてみたい。
- ☆ 中学校英語に対して、どんな期待を抱いて入学してくるのかのイメージが持てた。

#### 〈6年生児童の感想〉

- ☆ 中学校の先生の、「できること」や「できないこと」が分かってうれしかった。
- ☆ スピーチの言い方を教えていただいたので、次の時間にはいいスピーチができそう。頑張りたい。

#### 〈ビデオレターによる児童・生徒の交流〉

単元終末の第4時には、ビデオレターを扱い、それを媒体として中学1年生と6年児童が交流できる工夫を行った。児童はビデオレターを大変喜び、「聞きたい」という強い思いを持ち、熱心に視聴する姿が見られた。

また、先輩へのお礼の手紙には「来年、自分も言えるようになるのかと思うと、ワクワクする」等と中学校への憧れと期待を抱いた感想があった。また中学生は、小学生に見てもらうために、熱心に練習したと聞いている。

## 5. 研究の成果と課題

### (1) 成果

・地域や児童の実態、他教科等と関連させた授業を進めることで、児童の外国語活動に対する関心・意欲が高まり、進んで活動に取り組めるようになった。このことは、本年度10月に、5・6年生児童157名に行ったアンケート調査において、「外国語活動の時間は好きですか」という問いに対して、90%以上の児童が好きだと答えたこと、また、本校児童の長年の課題として挙げていた「伝え合う力」に関する「外国語活動の時間に友達と英語を使って話をするのは好きですか」という質問に、約80%の児童が肯定的な評価をしたことから分かる。

・児童同士の人間関係、周りの人々との関わりが豊かになってきたことを感じる。それは、友達の話に熱心に聞き、「もっと詳しく知りたい」と進んで質問する姿や、自分のことを相手に伝えようと発表内容を真剣に考え、何度も練習する等、児童の姿の変容から見る事ができた。

・進んで伝えようとしたり、友達の話を知ろうとインタビューしたりする等、コミュニケーション活動を楽しもうとする児童が増えてきた。このことは、伝え合うことのよさや楽しさを、児童自らが実感できるように活動内容や方法を工夫する等、思わず「聞きたい」「言いたい」と思うような、コミュニケーション活動を大切にしたい心が動く授業づくりを心がけてきたからだと考えられる。

・自分の思いを英語で伝え合うことが難しい時には、これまでの外国語活動で経験したことを駆使して、表情やジェスチャーを交えながら、何とかコミュニケーションを図ろうと

する児童が増えてきた。また、ALT や中学校教員の話の何とか理解しようと一生懸命に聞いている経験から、他の授業でも、友達の伝えたいことをしっかり「聞こう」とする姿勢が見られるようになってきた。

- ・外国語活動をはじめ、運動会や人権劇でも「気持ちを込めて言おう」「ジェスチャーをつけると伝わりやすいよ」と、進んでアドバイスをしたり、“Nice!” と励まし合ったりする姿が見られた。児童は外国語活動を通して、友達や周りの人々とつながることの楽しさや、自分の思いや考えを伝え合うことの大切さを実感したからだろう。

- ・歌を歌う際やスピーチ時の掲示物、パソコンを活用した教材、絵カード等、高学年担任だけでなく、多くの教職員が協力し合って教材・教具を作成したことが、活動内容のさらなる充実につながった。このことにより、児童が積極的に授業に参加できるようになり、コミュニケーション活動が豊かなものになっている。

- ・「鳴門市小中高連携外国語教育研究委員会」のリードのもとに中学校区ごとに「外国語教育推進委員会」が発足したことは、小学校と中学校が連携を進めていく上において、大きな成果だといえる。こうした体制の充実により、計画的に小中教員が情報交換したり、交流授業を行ったりすることができるようになり、児童の中学校へ期待や憧れ、児童生徒の意欲向上につながっている。

- ・小中連携は、児童生徒のために、小学校と中学校が、それぞれの立場で何をすればいいのかという意識改革をもたらし、授業の工夫・改善につながった。また、学びの側面はもとより、接続期の指導のあり方、児童生徒理解の面においても、小中教員が気軽に話し合うことができるようになり、心がつながり合う貴重な機会ともなっている。

## (2) 今後の課題

- ・評価の方法は、授業中の行動観察、振り返りカードの点検・分析が中心だが、学級担任一人の授業の場合、活動中に児童の支援をしながら、見とりをすることは難しい。指導に生きる評価のあり方について考えていきたい。

- ・小中連携については、小中教員が情報交換や交流を行う際の日程調整や時間確保等の課題もある。無理なく継続可能な小中連携のあり方について、今後も検討していきたい。

## 6. おわりに

本校の外国語活動はまだ始まったばかりで、課題もある。しかし、ALT や中学校教員の話す英語を一生懸命に聞き、それに対して何とか答えようとしている児童の姿や、自分の思いが伝わって満足そうな笑顔等から、児童がコミュニケーションの楽しさや大切さを実感していることを感じる。今後も、児童が友達や周りの人と関わること、伝え合うことの楽しさや大切さを実感できる外国語活動の授業を目指し、実践を重ねたい。